

オーストリア・ハプスブルク帝国の 非啓蒙的絶対主義の経済政策

— 皇帝フランツ 2 世と皇帝フェルディナントの時代の経済と社会 —

倉 田 稔

も く じ

序／ハプスブルク対フランス／神聖ローマ帝国の滅亡／
ウィーン会議／ブルジョア階級の出現／初期産業革命／
ビーダーマイヤー／農民解放／むすび

序

オーストリアの歴史学では、マリア・テレジア¹⁾とヨーゼフ 2 世²⁾の時代を改革、フランツ (Franz, 在位, 1792-1835)³⁾とフェルディナント (Ferdinand, 在位, 1835-1848)⁴⁾の時代を反動, 1848年に至って革命, としている⁵⁾。

マリア・テレジアとその長子ヨーゼフ二世は、啓蒙的絶対主義の立場から、その重商主義政策⁶⁾を押し進めた⁷⁾。次代のレオポルト二世⁸⁾の短い治世も、ヨー

1) Maria = Theresia (1717-1780)

2) Joseph 2. (1741-1790)

3) Franz 2. (1768-1835. 神聖ローマ帝国最後の皇帝。1806年以來, フランツ 1 世として, オーストリア皇帝。)

4) Ferdinand I. (1793-1875)

5) Vgl. Erich Zöllner, *Geschichte Österreichs. Von Anfängen bis zur Gegenwart*. 5. vermehrte Aufl., Wien.

6) 拙稿「ハプスブルク帝国と重商主義——マリア・テレジアとヨーゼフ 2 世の経済政策」(『三田学会雑誌』71巻 5 号, 1979年10月)。本稿は、この続きである。

7) Gustav Otruba, *Wirtschaftspolitik Maria Theresias und Josephs 2. Wien*.

8) Leopold 2. (1747-1792)

ゼフ二世の啓蒙的政策⁹⁾のすべてが撤回されたわけではなかったもので、啓蒙的絶対主義の時代であった。このためハプスブルク帝国は一八世紀後半から、近代的な経済の変化が行われた。ヨーゼフ二世の啓蒙主義的政治・経済政策は、封建諸侯と教会の反抗、同帝の死（1790年）、フランス革命の勃発によって、フランツ皇帝の時代には阻止され、近代的農村作りも挫折した。マリア・テレジアの時代に、オーストリア帝国は、厳格で中世的外観の君主政体をとっていた。ヨーゼフ二世には男子がいなかったが、レオポルト二世は子沢山であって、三人の男子がいた。第二人は有能で、1人はヨハン大公（1782-1859）、1人はカール大公（1791-1847）であり、ナポレオンと対決したそのカール大公は英雄となった。だが、ハプスブルクの長子相続制に従って、凡庸の兄フランツが皇帝になった。フランツの即位（1792年）を境に、オーストリア・ハプスブルク帝国は転換を迎え、それ以降1848年の三月革命までの半世紀余りを、オーストリアの非啓蒙的絶対主義の時代とすることができる。そしてこのフランツとフェルディナントの2人の皇帝の時代は、1848年革命で覆える。

1848年のオーストリア革命は市民革命としては失敗したが、最も重要な成果・変革があった。それは、農奴解放であった。1848年9月7日の法律である。農民解放によって産業革命の本格化の条件ができた。これにより帝国中で産業が発達した。

こうしてフランツおよびフェルディナントの時代は、以上2つの時代の間の時期である。

1792	1814&1815	1835	1848
フランツ 即 位	ウィーン会議	フランツ 退位=死去	フェルディ ナント時代 革 命

9) このヨゼフィニスムスは、3月革命後復活し、1860年代まで、帝国官僚の指導的イデオロギーであった。

ハプスブルク対フランス

ハプスブルク帝国は1800年に、ヨーロッパの人口の七分の一を擁する大国であった。この国は依然として農業国であった。このころオーストリアは、1万人以上の都市の人口が全人口(1789年に3100万人)の4.4%であって、ハンガリーではその比率はもっと低かった。農産物はほとんど輸出されなかった。この時代の最重要産業は農業であった。おおむね一八世紀まで三圃制農業¹⁰⁾が支配的であった。休耕地にはクローバーや飼料植物が植えられた。アルプス地方では、穀物と牧草を交代に栽培する、いわゆる穀草式であった。しかし、19世紀に入ると三圃制は少なくなった。オーストリアの総土地のうち、37%が農業、32%が森、14%が牧畜、1%がぶどう酒業であった。食糧は大体自国でまかなえた。農産物の商品流通については、羊毛やワインを除くと、ほとんど輸出されなかった。農業技術は、大いに進歩した。だが、それに貢献したのが、領主 Grundherr や農民 (= 農奴) ではなく、荘園と国家の役人であった。鋤が改善され、大鎌の代わりに半月鎌が用いられるようになった。ところで村落には失業が広まっており、一方で農民は酷く働いた。帝国は、ルスティカル・ラント (帝国の土地) とドミニカル・ラント (貴族の土地) に分かれていた。多くは、グルントヘルシャフト (古典荘園制) であった。

ヨーゼフ 2 世を例外として、オーストリア人は、思想やイデオロギーが嫌いで、新思想を受け入れなかった。人々の思想はカトリシズムであり、王 (= 帝) 権神授説であった。つまり神が皇帝を我々に与え、君主は国を幸福にするだろうと信じていた。実際この国の皇帝は神聖ローマ帝国皇帝であった。

オーストリア人は、政治に無関心で受動的であり、ウィーン市民は権利・主張をせず、生活を享楽した。フランス革命の勃発も当時オーストリアを混乱させなかった。彼らは暴動や騒乱を好まず、革命を恐怖の目で見た。マリー・ア

10) ヨーロッパ中世で、8から13世紀に成立した。耕地を3つに分け、1つを休耕地とし、他はそれぞれ、春蒔き、秋蒔きの耕地とし、毎年交替した。

ントワネット（フランス王妃、かつてオーストリア皇女であった。）¹¹⁾がギロチンの露と消えた1793年に、フランス革命に対するウィーン市民の怒りは燃え上がった。これが反動の時代の始まりであった。革命のパリに反革命のウィーンが対立する。ブルジョア革命対正統主義（=君主主義）の対立が現れた。ウィーン市民の間に亀裂が生まれ、これが次第に深く広くなっていった。「それは同時に階級闘争の曙であり、貴族とブルジョアの和気あいあいたる共存関係は、このフランス革命の頂点において崩壊しはじめるのである。」¹²⁾

1792年4月、革命フランスの立法議会はオーストリアに宣戦布告をした。1792年8月10日に、フランスの王権が停止し、共和国になった。1795年にフランスは再びオーストリア領ベルギーに侵入し、ベルギー領のオーストリア軍と戦った。しかし停戦し、和平をした。

こうしてハプスブルク帝国の政策は挙げて一切をフランス革命の二の舞いの防止においた。この政策は3月革命（1848年）まで続いたのである。この時代はまた、経済的には依然として重商主義=カメラリズムの時代であり、ほとんどマリア・テレジアとヨーゼフ二世時代の経済的構造が基本的に貫徹した。だがこれは同時に産業化時代への過渡期でもあった。ただし、ヨーゼフの寛容令により、ユダヤ人は経済的に活躍でき、進出した。

18世紀末から19世紀初頭にかけて、オーストリア社会はナポレオン（1769-1821）¹³⁾戦争によって震撼した。フランス革命の後、ナポレオンがヨーロッパに登場した。彼は、革命の輸出を考えたのだった。彼は世界共和国を望んだ。奇妙なことは、それが武力で行われることだった。そして共和制の輸出に対して、国際君主国が恐怖したのである。

ナポレオンはヨーロッパを支配しようとし、長いナポレオン戦争が行われた。このころのハプスブルク皇帝がフランツ二世であった。ちなみに彼は、名君で

11) Marie Antoinett (1755-1793)。マリア・テレジアの息女、ヨーゼフ2世の妹。伝記 ツヴァイク『マリー・アントワネット』岩波文庫 改訳 上下 1980年。

12) プリヨン『ウィーンはなやかな日々』音楽の友社 13ページ。

13) ナポレオン (Napoleon Bonaparte, 1768または9年8月15日~1821セントヘレナ)。

はなかった。フランス革命の継承者を自称するナポレオンは、共和国制度と民主主義を、戦争によってヨーロッパに広めようとした。そのため、フランス以外のヨーロッパ諸国王は、ナポレオンを恐れたのだった。

神聖ローマ帝国の滅亡

ナポレオンは、コルシカ島¹⁴⁾に生まれ、フランス本土に留学した。当時、将校は貴族の独占であった。1784年、彼はパリ士官学校に入る。そして貧乏小尉になる。ヴォルテール、ルソー、マブリー、レーナル、ユスティニアヌス『法典』、モンテスキュなど、非系統的に18世紀啓蒙主義を読んだ。スタンダールと議論したこともある。彼はフランス革命よりも、コルシカの革命に情熱をもっていた。だがコルシカ独立の英雄パオリと対立して、ボナパルト家はコルシカ島を引き上げた。1793年5月、ジャコバン＝モンタニアルの独裁となった。この時代については文学ではユーゴーの「93年」がある。トゥーロンだけが反革命軍の手にあり、砲兵第4連隊大尉ナポレオンの部隊が、そこを攻撃した。1894年テルミドール反動で、ロベスピエールが処刑され、ナポレオンも捕まった。国民公会は危機にひんし、国内最高司令官バラスは、トゥーロン攻撃の名指揮官ナポレオンを副官に採用した。彼はヴァンデミエールの反乱を鎮圧し、1794年、国内最高司令官になった。彼の軍事戦略は天才的だった。1795年にフランスは再びオーストリア領ベルギーに侵入し、ベルギー領のオーストリア軍と戦った。しかし停戦した。だが、フランスの王権廃止後、11月にジェマップの闘いでオーストリア軍を破った。

1796年にイタリア遠征軍司令官になったナポレオンは、同年オーストリア攻撃三軍の一つを司令し、イタリア・オーストリア連合軍をうち破った。またバルマ公国に進軍し、ロディの戦いで大勝し、1796年5月にミラノに入城した。6月に、マントヴァを攻撃した。1797年にはイタリア北部からオーストリアに

14) コルシカについては、文学では、そこを舞台にしたメリメの「マテオ・ファルコネ」がある。かつて、ルソーは「コルシカ憲法草案」を書いている。

進撃し、4月にレオーベンで休戦協定をえ、10月にカンポフォルミオ条約によって、フランスはロンバルディアを占領した。こうしてナポレオンはイタリアに、フランスの衛星共和国を建設した。ロンバルディアをトランスパダナ共和国、モデナ公国と法王領北部をチスパダナ共和国、もとジェノワのリグリア共和国をチルピナ共和国として作った。第1次対仏同盟戦争の時代(1793~7年)であった。この時代に、オーストリアは、ベルギーおよびイタリアのロンバルディア地方を失った。

1799年11月9日(ブリュメール18日)のクーデタによって、第一執政となったナポレオンは、その後オーストリアに奪還されたイタリアを奪うべく、1800年にオーストリアに対し開戦する。この第二次対仏同盟戦争の時代(1799~1802年)には、オーストリアは、奪回した北イタリアが再び奪われた。

ナポレオンは1804年に皇帝となった。この年、ナポレオンは、同盟国バイエルンに侵入したオーストリア軍をウルで撃った。その後、ミュンヘン、リンツからウィーンへ向い、入城する。12月2日、彼はオーストリア・ロシア連合軍をアウステルリッツの会戦で破った。プレスブルグの講和条約により、オーストリアは、ヴェニス、イストリア、ダルマチアを割譲し、人口の七分の一、国庫収入の六分の一、五千万フランを失った。第三次対仏同盟戦争の時代(1805年)であった。オーストリアは、アウステルリッツの敗北後、ようやく回復期に入った。

1806年に、バイエルン以下16のドイツ領邦がライン同盟を結成し、ナポレオンを保護者に戴いたので、さしもの神聖ローマ帝国もここに滅亡した。こうしてハプスブルクは負けて、神聖ローマ帝国皇帝の位を失った。1806年以来、フランツ二世はその帝位を退き、フランツ一世として、単にオーストリア皇帝と名乗るばかりであった。

イタリアはフランスの手に落ちた。ナポレオンの軍隊は強かった。それは彼の秀でた戦術によるし、闘争精神を鼓舞する彼のうまさにもあったが、根本的にはフランスの小土地所有農民が新しいフランスの政治体制に利益を持ち、それを守ろうとしたからであった。

第五次対仏同盟の時代(1809年)にワグラムの戦いで、オーストリアは敗れ、ナポレオンはウィーンに入城する。シェーンブルンの和約で、オーストリアはイタリア地方と8500万フランの賠償金を失った。こうしてナポレオンは、ドイツ、ロシアの一部、イタリアの一部、スペインなどを占領し、ハプスブルクを敗北させた。

だが1812年のモスクワ遠征の失敗によって、ナポレオン帝国は瓦解し始める。クトゥーゾフ将軍に打撃を受け、ナポレオン軍は退却する。その間、諸国民の解放戦争が始まった。その後、反ナポレオン連合国はナポレオンと戦い、1813年にオーストリアはフランスに宣戦する。1814年にナポレオンは退位し、1814年と15年に、かのウィーン会議が開かれ、ナポレオン戦争の時代は終りを告げるのだった。チロルではアンドレアス・ホーファー¹⁵⁾の対ナポレオンの闘いがなされた。

ウィーン会議

イギリス、ドイツ、オーストリア、ロシア、これらの王国の反ナポレオン勢力を政治的に指導したのが、メッテルニヒ(Metternich, 1773-1859)であった。彼は、オーストリアの外務大臣であった。ドイツ生まれで、若い頃フランス大使を務め、国際情勢に明るかった。彼は、ロシアとナポレオンのフランスの間にたって、ハプスブルクの勢力温存をはかった。そして彼は、完全な反ナポレオン主義ではなかった。英雄ナポレオンを敬愛していたし、フランス革命よりもナポレオンの方がずっとよいと考えた。

ヨーロッパの諸国王は、戦後処理を決定しようとした。それをウィーン会議(1814-15)で決めたのである。ナポレオン敗北後のウィーン会議で活躍したのが、またメッテルニヒである。メッテルニヒはヨーロッパ政治の勢力均衡を理想とした。そしてもちろん革命を嫌った。会議に集まった君主たちは、正統

15) Andreas Hofer, 1767-1810. リケット『オーストリアの歴史』成文社第2刷。

主義を唱えた。正統主義とは君主主義のことである。ヨーロッパではまだ王権神授説を持っていた。ウィーン会議によって、欧州はほぼ、フランス革命とナポレオン時代以前の領土を回復した。ハプスブルクは、再び北イタリアを領有することができた。ウィーン会議といっても名ばかりであって、会議体をなしていたのではなかった。ウィーンで、国王や大臣や外交官がそれぞれ各個独自に協定をしあつた。だから、なかなか戦後処理は決まらなかつた。「会議は踊る、されど会議は決まらず」と言われるが、每晚行われる舞踏会の合間に、政治的交渉や、かけ引きがおこなわれたのである。それは五強国による領土の分どりが重要な任務であつた。

ドイツは従来200近い国に分かれていたが、会議以後40程度に整理された。メッテルニヒはハプスブルクの外交を有利にもっていった。そして後1821年に、オーストリア宰相となるのである。ウィーン¹⁶⁾会議は、フランツ皇帝の生涯の画期でもある。

ブルジョア階級の出現

企業家について一つの皮肉な現象が発生した。マリア・テレジアとヨーゼフ二世の意図は帝国の統一と中央集権化にあつたし、上からの産業育成政策によって貴族の資本家化が行われたのであつた。彼らの重商主義政策によって工場の設立が促されたが、ほとんどの工場は貴族によって起こされ、特にベーメン(=ボヘミア)に集中した。一八世紀の末には、主に繊維業・ガラス業・鉱山業で工場数が増大してきた。フォアアールベルグは繊維業が盛んであつた。ガリチアとブコーヴィナは、1772-75年に帝国に併合された。

ところが一九世紀になると、上からの産業育成政策が進められなくなった。

16) ウィーン。一九世紀中ばまで、ウィーンは、城壁に囲まれ、都の周囲は堀でめぐらされ、城門があつたのである。ウィーンはドナウ川沿いにあり、ドナウはよく氾濫したからである。ウィーンの人口は、近郊をふくめて、1796年に23万5千、1810年に22万5千、19c. 中ごろ43万であつた。(Vgl. Zöllner.) ウィーンの人口はマリア・テレジアの治世に、8万8千人から17万5千人に増加した。

政府の経済への作用＝影響がだんだん少なくなったのである。そこで企業設立の担い手は、徐々に貴族から非貴族へと移っていった。ブルジョアの企業家が増大してきた。伝統的な貴族の経営者ではなくなった。オーストリアにとって重要な事実であるが、このブルジョアジーの由来がまた興味をひくものである。オーストリアでは莊園管理人から資本家になる例が多かったと、ブルーサッティ（Alois Brusatti）は述べている。

18世紀の終りにオーストリアの自然条件と社会的歴史的条件は、帝国の経済が成長するには都合がよくなかった。経済の発展の水準は、帝国の主要産業部門では、西ヨーロッパにくらべて極端に後進的であった。ドイツに比べてもオーストリアの体制は企業家に不利であった。また官僚が実権を握っていた。工業化を始める条件、すなわち資本・企業精神・専門労働者は確かにあった。またウィーン盆地とアルプス地方が伝統的な手工業の中心地であって、アルプス地方の森林業、ベーメン（ボヘミア）・メーレン（モラビア）の鉱山は、好い条件があった。しかし工業のための資源は、新しい技術によって急速に経済を成長させるのに不都合であった。特にハンガリーがそうであった。帝国の弱点は、石炭、特にコークス用石炭の埋蔵量が不足していたことであり、そのエネルギーは木と水であった。

ついで、帝国の発展した地域でも商業活動が低く、市場の発達が遅れていた。18世紀の終りにオーストリアの商業・金融には、外国の資本と企業が大いに入り込んでいて、ドイツ人、スイス人、イタリア人、ギリシャ人が、内外の商業で著しく活躍していた。帝国はヨーロッパの商業に余り参加していなかったし、輸送水準も低かった。ドナウ川は雨期にはいつも氾濫した。

生産は工場制手工業よりも手工業が支配的であり、ドイツに比較しても、低賃金で高利子であった。冶金生産でも西欧に劣っていた。オーストリアの工場は軍隊や金持ちのために生産した。

以上の状態は、帝国の意識的な政治・経済政策の結果でもあった。帝国は資源の開発や大規模な輸入を行わなかったし、行なえなかった。というのは帝国の政治目標は、帝国の維持保全と、ヨーロッパの権力政治の中で帝国を主人公

にしておくことであったからである。実はこの政治目標はますます実現しなくなってゆくのであった。帝国つまり君主制を維持する主勢力は、貴族、教会（＝カトリック）、軍隊、官僚であって、彼らは資本主義化とその急速な工業化が自分たちを危険にすると考えた。

帝国は、トランス・ライタニエン（ハンガリー側）¹⁷⁾の低生活・低生産水準を有利だと見た。安い食料品と原料品をチス・ライタニエン（オーストリア側）に確保できるからである。この体制を温存するためにハンガリーの封建勢力との同盟が必要となった。一方、オーストリアのドイツ人系有産階級あるいは有力ブルジョアジーは、帝国の維持と政治的安定を最上位におき、また議会主義と自由貿易に反対し、保護関税に賛成した。

民間部門の発展によってのみ、急速で長期の経済成長が可能になるのであったが、帝国の民間部門はかなり遅れていた。そして競争市場を欠いていたため、生産力の配分が正常でなくなった。また技術、資本、企業家の流入・導入の点で不利となった。こうして帝国の政策は、初めの目標に反してオーストリアの国際的孤立をもたらすと同時に、工業化目的と一致しなかったのである。

初期産業革命

ナポレオン戦争（1796～1815年）によって新しい様相が生まれた。とくにイギリスのロスチャイルド商会は、ナポレオンや各国政府・王朝に巨額の軍費を貸し付けた。ヨーロッパの貿易はちぐはぐになった。商品と労働力に対して巨大な軍事的需要が生じ、物資不足とインフレーションとをひき起こした。そのためにこの時期に、西・中欧諸国に初期産業革命が広がった。特に機械利用の大木綿工場が起きた。ハプスブルク帝国にとっても、ナポレオン戦争は工場制手工業を導入する一因となった。ハプスブルク帝国内で機械が使用された初めは1787年であるが、イギリスの、それも水力による紡績機であった。

17) ウィーンとブダペストの間に、ライタ川が流れていて、ライタ川よりもこちら（チス）、あちら（トランス）と呼んだ。

19世紀前半では、自営業者は家族を除いて、1831年に60万人、1847年に78万人であった。工場資格は一万未満であった。工場と営業の違いは、経営の大きさと形態にもあったが、さしあたり権利の違いであった。

ハプスブルク帝国の最重要生産部門は繊維業であり、総価値の45%を占めた。木綿製品産業は、端緒的工業化の寵児であった。原綿の輸入は一九世紀第2・四半期の間に7倍、その加工品は2倍に増えた。オーストリアの木綿生産は1800年ごろにヨーロッパ大陸の中で顕著な地位を占め、1840年に紡錘の数はドイツ関税同盟のそれを越えた。ウィーン盆地（ポッテンドルフ）や北ベーメン（＝北ボヘミア）の多くの工場は、ヨーロッパで最大のものの一つに数えられた。

しかし太糸生産に片寄ったことと、1835～40年の不況で、帝国の木綿工業は停滞し、ヨーロッパ諸国の競争に負けてしまった。綿布業は1840年後まで、確実な家内工業で、農民が副業として極めて安い工賃で働いていた。そのとき大紡績業者は間屋の役割をした。1840年に機械の織機が応用されて、工場（例えば、ウィーン、シュヴァードルフ、クラインミュンヘン、北ボヘミア）に生産物が集積された。安価な生産物を作る綿布工場が設立されて、家内工業は衝撃を受け、こうして工業時代に初めて社会的騒乱が、工場労働者でなく家内労働者によって起こされた。シュレジエンの例であるが、この事件をハウプトマン（G. Hauptmann）は、『織り工』（Die Weber）で描いたのだった。

羊毛品の生産は木綿工業よりも大規模であった。オーストリアは1840年まで世界で最大の羊毛生産地であって、帝国の全輸出額の五分之一が羊毛であった。牧羊は特に重商主義者の寵児であって、そのため広範な織布業が発生した。1830年後まで布や他の羊毛品は商業的に生産され、またこれを工場が行うようになった。しかし布を織り毛を刈る職人の数は減少した。1831年に1万1千人、1840年に8千3百人、1847年に6千4百人であった。これと同時にその工場数は急速に増大した。とりわけベーメン（＝ボヘミア）やメーレン（＝モラヴィア）であった。ベーメンは羊毛生産の中心になり、羊毛品生産物価額の45%を占めた。ブリュンにあったある企業は、1000人を雇い、ヨーロッパ大陸で最大の一つとなった。

亜麻布（＝リンネル）産業は、北ベーメンとシュレジエン、後にガリチエンが中心になった。絹工業は、ロンバルダイーヴェネチア王国の特産で、中心地はヴェローナ、プレスチア、ベルガモ、コモであった。オーストリア帝国はそのため、ヨーロッパで原絹の最大生産地となった。絹製品の生産はフランスに次いだ。

ミラノ（帝国内）とウィーンは、精巧な品の40%を生産した。ウィーンは、他の奢侈品、例えば精巧な皮製品の中心でもあって、工場が50であった、だが最大の工場は40人しか雇っていなかった。

19世紀の前半は、寄木細工のような近代工業の中心地は、農家経済・職人経済の中で成長した。農民や職人は、市場向け生産の誘因が増大したが、制度と技術の保守主義が強かった。自由放任の島々が前資本主義的伝統と諸関係という大海に囲まれていた。

三月前期の主な経済的矛盾の一つは、かの厳密な保護主義的関税政策であった。これは歴史的に継続されていなければならなかったし、またオーストリア工業の保護を目的としていた。ところが逆に、これが工業上の速い成長と技術革新を妨げた。ドイツ関税同盟との合併を準備した1841～43年の改革計画は、メッテルニヒに支持されたが、これは主にウィーンとアルプス地方の産業的既得権によって反対された。

初めのオーストリア鉄道は、私企業によって、計画され資本調達された。3つの銀行家が宮廷と結び付いて、会社を起こした。1825年3月、85万フロリンが大衆によって応募された。路線はモルダウ＝ブルダヴァとドナウを結ぶもので、つまり北海から黒海まで結ばれることになる。建設は初めの見積りより時間と費用が掛かった。グムンデンまで延長するのは利益だと考えて、ルートシルトが加わった。帝国では、ブートヴァイスーリンツ間鉄道は、長距離軌道としては、大陸で初めての鉄道で、1832年には130km、1836年には200kmに達した。

オーストリアではじめての主要な近代化・機械化の波は1830年代にやってきて、三月革命直前まで続いた。この時期の主要産業は繊維と鉄であった。とくに木綿と銑鉄が最も重要であった。紡績は機械化され、30年代終わりまでにニー

ダー・エステライヒの木綿紡績は実際すべて機械であった。ベーメン（＝ボヘミア）の木綿工業の中心は北部であり、ライヘンベルグの周りであった。重要な印刷企業はプラハにあった。

イギリスで1769年にワットが蒸気機関の特許を取っていたことを考えると、ハプスブルク帝国での機械の利用はきわめて遅い。1801年にイギリス人ソーントンが、ベーメンに機械化木綿紡績工場を設立した。この種の水力繊維工場は1807年までに、なお6ヶ所建てられた。紡績行程の機械化につづき、織布行程の機械化がはじまったり、ウィーン近郊でフィリップ・ド・ギラルールが、1816年に亜麻布（リンネル）織布工場を設立した¹⁸⁾。

三月革命前では、オーストリアで産業革命の端緒が形成されたと言える。工業の中心は繊維業であった。地帯構造から言えば、帝国の西方つまりハンガリーではない側が、主な担い手であった。機械制工場が出現したが、はじめは水力であり、蒸気機関はイギリスの技術と技術者に依存し、イギリスから購入した。しかしその後オーストリア独自の生産が急速に可能になった。とはいえ、蒸気機関の生産はイギリスに遅れること半世紀である。1810年代に輸入された蒸気機関が、ゆっくりと普及し、40年代には最も広汎になった。

ベーメン（＝ボヘミア）、メーレン（＝モラヴィア）、ニーダー・エステライヒでは、紡績と先駆的機械への必要がおき、国内の技術産業に刺激を与えた。事実、大陸で最大の紡糸工場の一つが、イギリスの機械工の経営によりウィーン近郊のポッテンドルフにできた。中央ヨーロッパの相当数の活動的で前進的な企業は、1820年代の停滞期を生きのびた。西ヨーロッパよりもコスト高であった繊維機械も、諸地方で設置されつづけた。

紡績機はベーメンでは、ニーダー・エステライヒより小さかったが、蒸気機関を早く採用した。第三の木綿工業地帯はフォアアールベルグであった。1828年に木綿紡錘数は帝国で43万5千で、うち22万5千がニーダー・エステライヒ、11万8千がベーメンにあった。1841年には帝国で100万、ニーダー・エステラ

18) D. Long, Phillip de Girard and the Introduction of Mechanical Flax Spinning in Austria. in : *Journal of Economic History*. N. Y. 1959.

イヒが38万8千、ベーメンが35万5千であった。1847年には合計で134万6千であった。オーストリアの紡績は荒糸に集中していて、織布は手作業であった。

羊毛生産工業は1830年代と1840年代に急速に発達し、その中心はウィーン、ブリュン（メーレンの首都）、ライヘンベルグであった。

石炭はオーストリアでは高価だった。グロス氏の算出によれば石炭消費量は、1831年に15.2万トン、1850年に74万6千トンであった。銑鉄生産は石炭のそれより少なく、1828年に7万3千トン、1850年に15万4千トンであった。1830年に錬鉄法が、1844年に蒸気槌が導入された。

蒸気機関は高価で、燃料供給もむずかしかった。1841年に工業生産総額が8億フロリンで、その四分の三が比較的大きな工場、四分の一が小企業あるいは職人によった。ハンガリーはその八分の一だった。

紙産業の工業化も同じくぐずぐずしていた。ベーメン（ボヘミア）の有名なガラス生産は、恐慌後1835年からフランス流の方法を利用して恐慌を回避した。

シュタイエルマルクとケルンテンは、鉄工業の中心であった。ケルンテンの工業は前進した。錬鉄法や初めての鉄道軌道が入った。この分野で工場が設立されて、小営業経営がやめさせられた。

1841年統計によれば、オーストリア、ベーメン、ロンバルダイ＝ヴェネチア王国の大規模産業の総生産額のうち、繊維産業が43.5%、冶金・機械両産業が合わせて11.1%であった。

1830-32年、コレラで人口が減った。ニーダー・エステルライヒだけで死亡率が15%だった。1830年には、生まれた子が1年以内に2/3が死んだ。19世紀はじめから産褥熱が起き、ウィーンでは10%の母親が死んだ。

オーストリアは、宰相メッテルニヒを戴く、ヨーロッパ反動の牙城となった。メッテルニヒはしかし、ハプスブルク帝国にあって有能な政治家であった。彼は自由主義、つまりフランス革命に至るであろう急進主義を、撲滅しようとした。

ウィーン会議によって再びハプスブルクは、北イタリアを占領した。だからイタリアで民族主義、オーストリアからの民族解放の運動が起きていた。イタ

リア人民はオーストリア絶対主義とその厳しい圧迫のもとに苦しんだ。秘密結社カルボナリ党（炭焼き党）ができた。オーストリアの警察に捕まった人々は、ブリュンに近いシュピールベルクの監獄に入れられた。これはオーストリアで最も恐ろしい有名な監獄で、「メッテルニヒの監獄」であった。例えば、カルボナリ党員シルヴィオ・ペリコがここに入れられた。1820年にナポリでカルボナリ党の反乱が起き、立憲制をかちえ、その後倒された。だが後にカプール、マツイーニ、ガリバルディが登場し、三月革命以後、イタリアをオーストリアから分離しようという、イレデンタ運動が実現されて来る。

ウィーン会議でハプスブルクはベルギーをオランダに与えた。その後1830年に、ベルギーはオランダから独立した。ポーランドも、ウィーン会議でロシア・プロイセン・ハプスブルクに分割された。

フランツ二世の時代は、ナポレオン戦争の時代であり、皮肉なことだが、そのため戦争景気が起きた。1830年代から初期の産業革命が発生した。

1821年、メッテルニヒは宰相になった。彼は抑圧した。彼は主に外交を行なった。フランツは凡庸であって、すべてをメッテルニヒと官僚に任せた。1826年、コロヴラート¹⁹⁾が、内閣大臣に任命され、国内政策・財政を任せられ、メッテルニヒと対立し、かなり自由主義的であった。1831年以来、コロヴラートが官僚として地位をえ、官僚が権限を持った。帝国は自由経済制度に反対し、重商主義的であった。ハンガリーは独自の関税があった。オーストリアでは商業と市場の発達が遅れていた。18世紀の終りには、外国の資本と企業が入り込んでいた。企業設立の担い手は貴族から徐々に非貴族に移った。産業は後進的で、手工業が支配的で、エネルギー手段を欠いた。工業化が支配層には危険に見えた。オーストリアでは産業的発展は上から促進された。

「小営業者は、中世的同業組合の狭い枠の中に閉じこめられていたが、これらの組合は、……その強制的組合の構成員に、一種の世襲的安定を与えていた。最後に、農民および労働者は、単なる課税物件としてとり扱われていた。」²⁰⁾

19) コロヴラート (Franz Anton Graf Kolowrat, 1778-1861) .

20) エンゲルス『革命と反革命』岩波文庫 1961年, 48ページ。

[オーストリアは、ウィーン会議の]「講和後には、たちまちヨーロッパの大金融市場におけるその信用を回復した。……ヨーロッパのすべての大金融業者は、その資本のかなりの部分を、オーストリアの公債に投じていた。」²¹⁾ 国の財政はいつも赤字であった。政府はいつもロートシルト (Rotschild) から借りた。²²⁾

ハンガリーは独自の関税があった。帝国には関税とともに検閲があり、これは1815年から30年間続いた。ヨーゼフ二世の政策を廃止したのであった。オーストリアはヨーロッパに、ヨーロッパはオーストリアに知られなかった。

フランツ皇帝の時代は、初めは対フランス、対ナポレオン戦争の時期、後は、ウィーン会議以降に区分される。初めは、フランス革命への恐怖、そしてナポレオンへの恐怖、そして、後には、自由主義・民主主義・民族主義への反対が、根本になった。

この時代の政策は、重商主義の後退した一変種である。保護関税政策をとり、工業化・近代化を恐れた。エネルギー、市場、輸送、民間経済で、劣っていた。産業の中心は繊維業であった。輸入、資源開発を行わなかった。近代工業は、大海の中の島であった。基本は農業であって、荘園が中心であった。帝国は、旧秩序を頑固に守ろうとした。機械製工場は、マニュファクチャーより少なかったが、そのマニュファクチャーも少なかった。プロレタリアートはいなかった。労働者とは、ほとんど職人であった。フランツの時代は産業奨励政策をとらず、また保護関税政策をしいた。輸入や資源開発も行わず、農民解放も廃止した。そのため、工業化・近代化は立ち遅れた。

[メッテルニヒは、人民の]「これらの階級については、ただ1つの政策しかもっていなかった、すなわち、彼らからできるだけ多くのものを租税の形でしぼり取ると同時に、彼らをおとなしくさせておくこと、これである。商工第3階級は、オーストリアでは、遅々たる発展を示していたにすぎなかった。ドナウ河の貿易は比較的重要ではなかった。また、この国は、海港としてトリエ

21) 同、46ページ。

22) Zöllner.

ストをもっていただけであり、しかもこの海港の貿易ははなはだ限られたものであった。製造業者についていえば、彼らはかなり手厚い保護を受けており、それは、多くの場合、あらゆる外国の競争を完全に排除する程度のものでさえあった。だがしかし、こうした優遇は、主として彼らの租税支払能力を増大するという見地から与えられたものであって、製造業に対する国内的制限や、政府の意図と目的とを妨げない限り慎重に擁護されていた同業組合その他の封建的組合の特権によって、著しく減殺されていた。」²³⁾

1830年代からハプスブルク帝国では、初期の産業革命が発生した。これは、フランツ1世にとっては、晩年である。

「メッテルニヒ公の政府は、2つの軸を中心として運営されていた。……第1には、オーストリアの支配下にある異種の民族の各々を、同じような状態にある他のすべての民族によって牽制することであり、第2には……封建的地主および大証券取引資本家という2つの階級にすがってその支持を求めること、」²⁴⁾であった。「さらに加えて、[メッテルニヒは] 絶対主義のあらゆる目的のためにこれ以上うまく組織することができないような軍隊と官僚とを持っていた。」²⁵⁾「ふるい、既成の、伝統的權威が、国家の權威と同じように維持されていた。」²⁶⁾

帝国の経済政策は、ハプスブルクの中心勢力を守ろうとしたものであった。そのため経済的停滞を招いた。こうしてその目的が矛盾におちいった。

ビーダーマイヤー文化

ウィーン会議で、ナポレオン時代が終わり、経済発展により小市民によるビーダーマイヤー文化の時代が始まった。ビーダーマイヤー文化²⁷⁾が、ナポレオン戦争の高景気以降の富裕さから、発生した。1815年(=ウィーン会議)以来、一

23) 同、48ページ。

24) 同、45ページ。

25) 同、47ページ。

26) 同、49ページ。

27) この項は、『事典 家族』(弘文堂)の拙稿を利用する。

部の、裕福なブルジョアジーが生成した。彼らの富をもとに、この文化が生まれた。小市民の生活様式が出来てきた。オーストリアではその代表的文学者に詩人・小説家アーダルベルト・シュティフター²⁸⁾がいる。彼らは、政治には関心を示さず、自分の文化生活を大切にする、小市民である。この時代は、ヨーロッパ革命(1848年3月)までの間とされる。美術工芸、文学を含む、30年間の文化史の時代である。特に1830年代に典型的な、小市民であり、ドイツやオーストリアのそれである。

ビーダーマイヤー家族は、国民の中で少し生活が豊かな層であり、そのため、家庭内で美しい家具・調度品などを整え、愛好し、服装に意を用い、好みの収集をし、独得の文化を享受しようとした。家族や友人・仲間の親睦が大切だとされた。それができたのは、初期産業革命のお陰である。ナポレオン戦争の影響で、逆に、ヨーロッパには産業が栄えたのだった。ドイツでは関税同盟(1834年)ができた。鉄道も作られ始めた。

その文化は、しかし、メッテルニヒ反動政治で政治的には萎縮せざるを得なかった。つまり1809年からのオーストリアの外相、後に宰相のメッテルニヒが、フランス革命=共和制革命の再発を恐れ、共和主義、自由主義、民族主義を弾圧したので、人々は、政治的・社会的発言はできなかった。検閲も導入された。メッテルニヒが、ウィーン会議から1848年の三月革命まで、反動政治を行ない、進歩的運動を弾圧し、ドイツにもそれを要求した。こうして、検閲、抑圧、国家の干渉の体制が続いた。この間、ドイツ、オーストリアの小市民にとって、政治に参加することは危険であった。間違えば、メッテルニヒの恐怖の監獄、シュピールベルク監獄が待っていた。彼らは、政治・社会問題に首を突っ込まなかった。こうして穏やかな文化の時代が続いた。²⁹⁾

人々は、政治的行動をとらなかった。音楽ではベートーヴェンの時代であっ

28) Adalbert Stifter, 1805-1968. 主要作品に、『石さまさま』、『水晶』、『晩夏』、『ヴィティコー』などがあり、多くが邦訳されている。

29) 前川道介『愉しいビーダーマイヤー』国書刊行会 1993年。
マックス・フォン・ベーン『ビーダーマイヤー時代』三修社1993年。

た。劇作家では、ライムント³⁰⁾、グリルパルツァー³¹⁾、ネストロイ³²⁾がでた。ライムントは、ウィーン生まれの劇作家・俳優である。彼の若い時代は、ナポレオン戦争の時代であった。活躍したのは、ウィーン会議後である。1817-30年に、レオポルトシュタット劇場の喜劇俳優として演ずるかたわら、劇作と演出につとめ、ウィーン通俗劇の向上に尽くした。戯曲「百万長者の百姓」1826年、「アルプス王と人間嫌い」1828年、「浪費家」³³⁾がある。当時のオーストリア貴族=大地主は、勤儉・貯蓄の人々ではなく、このような殿様の姿を、ライムントは、『浪費家』の主人公フロットヴェルとして、誇張して描いた。

ビーダーマイヤーという言葉自体は、19世紀中ごろから使われ始めた。だから当時の言葉ではなく、後世の造語である。ビーダーは実直・愚直の意味で、マイヤーはドイツでありふれた姓である。2つの語をくっつけたものである。ビーダーマイヤーという名の小学校の教師の作として、雑誌『フリーゲンデ・ブレッター』に、1850年代後半に、詩が載った。これが発祥である。作者は、ドイツの医者アードルフ・クスマウルである。

この時代以後でも、こういう生活態度をとる人々は、ビーダーマイヤー的と言われることもある。1848年革命で、メッテルニヒはロンドンに亡命するし、それ以後ドイツやオーストリアでは本格的な産業革命が始まることになる。

30) Ferdinand Raimund, 1790-1836.

31) Franz Grillparzer, 1791-1872, 翻訳で、『海の波 恋の波』岩波文庫、『ウィーンの辻音楽師』岩波文庫、『ザッフォ』岩波文庫、『ゼント・ミール僧院』第三書房、『ペートホーヴェンの思い出』大学書林、『グリルパルツァー自伝』名古屋大学出版会、などがある。

32) Nestroy, 1801-1862, 翻訳では、『ネストロイ喜劇集』ウィーン民衆劇研究会編訳、行路社1994年、『ウィーンの茶番劇』ネストロイ研究会訳、同学社 1996年、がある。

33) 中央大学教授・新井裕氏が試訳をした。

農民解放

1848年にヨーロッパで革命がおきた。ハプスブルク帝国でも、ミラノ、ウィーン、ブタペスト、その他でおきた。この革命のさ中に農民解放が行われた。

農村住民は、1つの望みだけを知っていた、つまり土地負担の廃止とグーツヘル＝農民関係の解体であった。農民が革命に参加したのは、ブルジョア知識人の目標のためでなく、かれら自身の要望のためであった。

1848年3月18日の令で、さしあたりベーメン・メーレン・シュレジエンに向けて公布されたのは、賦役仕事への約束は1年以内に、遅くとも1849年3月31日に廃止せねばならないことだった。このために有資格者に保障が与えられねばならなかった。有資格者の規定は立法過程に任された。その間、指定の時点の前に、賦役を廃止する内容が好意的に協定されることが、関係者に任されるはずであった。すなわちそれは、1846年12月18日の宮廷布告に対して、改めて指示されたもので、それを補完するために、つぎの2カ月のうちに一連のさらなる指令が発布された。負担償還を土地譲渡の方法で軽減するというものである。

導入された措置は、全帝国でなくベーメン王国だけに行われた。その後、シュタイエルマルク、ケルンテン、クラインの、身分代表議会の申し入れでこの3つの州にも州立法によって、同じことが着手された。

三月期以来、政治でも州議会でも農民問題の最終解決は決まらなかった。

政府は3月の諸事件に完全に驚いた。起きたことに準備なしで、助言なしで、向かったし、これから何がおきるか、分からなかった。臣民的な奉仕や他の農民負担の廃止への要求がますます大きくなり、それらを維持したり、一層の存続も可能だとは、もう誰も考えなかった。政府はついに、農村住民の希望に譲歩し、賦役廃止を導入することを決めた。³⁴⁾

こうして賦役問題は、州議会でも、憲制議会でも、「政治的努力の軸点」を

34) Karl Grünberg, *Die Grundentlastung*. Wien 1899, S. 38.

なした。1848年革命で、ウィーンでは、7月11日に立憲議会が召集された。これは革命時の約束であったからである。そして7月22日に、同議会が始まる。24日または26日に、急進派議員ハンス・クートリヒ (Hans Kudlich, 1823-1917)³⁵⁾が法案を提案した。これは後述するが、極めて重大な提案つまり農民解放令である。8月8日に議会で、このクートリヒ案が討議された。8月31日、国会で隷従制廃止が決議された。これは保守派のラサー (Lasser) が執筆したものである。クートリヒの革命的提案はここで少し修正された。9月6日、同決議をフェルディナント皇帝が認め、7日にこのラサー法が布告された。

1848年9月7日、帝国議会は、農民の人身的諸義務だけを無償で廃止する法律を可決した。賦役と年貢は賠償金を払えば廃止されることになり、その額は農民の年間支払い額の20倍と定められた。買い戻し金の3分の2は農民が支払い、3分の1は国家、すなわち広範な層の納税者が支払うことになった。このような改革の成果は、農民層のうち最も豊かな人々だけが地主に多額の金を支払って諸義務から解放されるようになったことである。この改革は、農業への資本主義的諸関係の一層の浸透に役立ったものの、オーストリアの土地問題を最終的に解決するものではなかった。だがヨーゼフ二世の理想がここに実現したのだった。

農奴解放については、かつて1772年の年貢令 (Robotpatent)、1781年の隷従制 (Leibuntertanigkeit) の廃止、が布告されたのだが、これはその後なくなっていた。しかしオーストリアにおける古典荘園制は、1848年の革命で廃止されたのである。1848年は、産業革命に原因を持っているものではなかった。それがなかったことが原因であった。(テイラー『ハプスブルク帝国』筑摩書房)

農民解放によって産業革命の本格化の条件がでてきた。本格的な産業革命は、三月革命以後迎えられる。三月前期は、いわばオーストリア産業革命の端緒的形態あるいは初期産業革命であった。

1848年の社会・経済的領域での最も深い変革は、農民身分の土地解放であっ

35) Friedlich Prinz, *Hans Kudlich und seine Zeit*. あり。

た。これによって長い時代にわたったグルントヘルシャフトが終わった。一方、隷従状態の排除は、フランツ・ヨーゼフ時代の経済的進行過程に多様な影響を与え、1850年代に行われた大改革の発端になった。例えば、鉄・コークスの生産は³⁶⁾飛躍的に発展した。フランツ・ヨーゼフ一世³⁷⁾の時代に、ハプスブルク帝国の産業革命は決定された。1848年以降になってやっと、ハプスブルク帝国は、決定的局面に入り、経済・社会構造がドラクティックな転換を起こす。

む す び

フランツ皇帝とフェルディナント皇帝の時代と経済政策は、一方で、マリア・テレジアとヨーゼフ二世の啓蒙主義的経済政策、および、他方で1848年革命と農民解放令、その2つのあいだにある時期である。前時代と違って意図的な産業奨励策をとらなかった。また後の時代のように、農民解放、産業革命の前提条件がなかった。その時代の前半は、対フランス、対ナポレオン戦争の時期、および、後半は、ウィーン会議以降に区分される。初めは、フランス革命への恐怖、そしてナポレオンへの恐怖、そして、後には、自由主義・民主主義・民族主義への反対が、根本になった。この体制は、重商主義の一変種と見なされる。保護関税政策をとった。そして工業化・近代化を恐れた。エネルギー、市場、輸送、民間経済で、劣っていた。産業の中心は繊維業であった。輸入、資源開発を行わなかった。近代工業は、大海の中の島であった。基本は農業であって、荘園が中心であった。旧秩序は頑固に守ろうとした。マニユファクチャーが少なかった。この時代には、いわゆるプロレタリアートはほとんどいなかった。労働者とは、職人であり、せいぜいマニユファクチャー労働者であった。

36) 1850年の主要生産は

	1828年	1850年
鉄	73.000トン	154.000トン
コークス	184.000トン	850.000トン

(Wirtschaft Österreichs, S. 141.)

37) Franz Joseph I. (在位 1848-1916)

ビーダーマイヤー文化が、ナポレオン戦争の高景気以降の富裕さから、発生した。その文化は、しかし、メッテルニヒ反動政治で政治的には萎縮せざるを得なかった。そして検閲制度があった。

この時代の経済政策は、ハプスブルクの中心勢力を守ろうとした。それが経済的停滞を招いた。こうして目的が矛盾におちいった。

【その他の文献】

- 1 倉田 稔『ハプスブルク歴史物語』NHKブックス。
- 2 ゲルリヒ『オーストリア文学史』南江堂 1983年。
- 3 Anton Tauscher, *Wirtschaftsgeschichte Österreichs*. Berlin 1974.
- 4 Ferdinand Tremel, *Wirtschafts- und Sozialgeschichte Österreichs. Von den Anfängen bis 1955*. Wien 1969.
- 5 Robert A. Kann, *A History of the Habsburg Empire, 1526 - 1918*. University of California Press, Berkeley/Los Angeles/London 1974
- 6 Johann Slokar, *Geschichte der österreichischen Industrie und ihrer Förderung unter Kaiser Franz I.* Wien 1914.